

図書館だより No. 11

平成 25 年 3 月 22 日発行

3年生が卒業し、どこか寂しさを感じながら過ごした3月も残り僅かです。寒さを感じる日よりも、暖かな春の気候を感じる日のほうが多くなってきましたね。この週末には、この近辺でもお花見を楽しめるかもしれません。日本さくらの会が定めた「日本さくら名所100選」に埼玉県からも、大宮公園(さいたま市)、熊谷桜堤(熊谷市)、長瀬(秩父郡長瀬町)が選ばれています。外で過ごすのに、心地よい季節となりましたし、週末にはどこかへ出かけてみてはいかがでしょうか。



さて、4月からはみなさんも新学年となり、新1年生を迎えることとなります。新年を迎える1月よりも、新学年の始まるこの4月のほうがみなさんにとっては気が引き締まる思いを感じる時なのではないでしょうか。この春休みは、のんびりとした時間を過ごしつつも、4月からの計画を立て、新学年を迎える準備を万全にしておきましょう。

桜をよく知る*

479-オ『サクラ ハンドブック』 大原 隆明 || 著 文一総合出版

出かける先々で、目にする桜に心が和む春。外へ出かけるのが、いつも以上に楽しみな季節です。桜は「見分けるのが難しい」と言われている花なのだとのことですが、せっかくお花見をするのなら、それぞれ桜をじっくり見て、それが何という桜なのかも知りたいところです。このハンドブックでは、細かな写真つきで、わかりやすく、それぞれの桜が紹介されています。各ページ、桜の名前の上に特徴が一言添えられているのですが、「イギリス生まれのサクラ」や「名作文学にも登場する」など、桜に関する豆知識が増える楽しい一言になっています。

桜に似合うのはやっぱり和菓子*

588-ワ『和菓子』 グラフィック社

お花見のお供にしたいのが、桜の雰囲気にも似合う和菓子。桜同様、和菓子もその見た目の美しさで私たちの心を惹きます。味わうだけでなく、目でも楽しませてくれる和菓子ですが、残念ながら日本に暮らしながらも和菓子に関する知識が薄い人が多いのも事実です。そんな人に和菓子の世界を知ってもらうのにおすすめなのが、この本です。四季折々の和菓子の紹介から始まり、茶事における和菓子の存在、和菓子の歴史、和菓子のための器、そして、伝統の味の紹介と、日本の美・職・技の詰まった和菓子のことを深く広く知ることができます。

図書館カレンダー

3月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

4月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

開館日 閉館日

以上の日程で図書館は春休み及び新学年の開館をします。

現在、春の長期貸し出しも行っており、1人5冊まで借りることができます。返却日は4月12日(金)となります。ここで、春休みに楽しめるおすすめの本を紹介します。

913.6-モ『虹の岬の喫茶店』 森沢 昭夫 || 著 幻冬舎

「おいしいコーヒーと音楽♪ 岬カフェ ここを左折」、そんな看板につられて、雑草の生い茂る道を進むと、小さな岬の端に小さな喫茶店が姿を現す。1匹の犬に案内され、店のドアを開くと、古い椅子とテーブル、CDとレコードが並んだ棚、絵画のような風景と8色の虹の絵が目飛び込んでくる。店主の悦子さんが淹れてくれるとびきりおいしいコーヒーと流れる音楽に身を委ねていると、自然と心が解れていく。岬カフェでのひとときが、その人の人生を幸せな方へとひと押ししてくれる。そんな魔法みたいな喫茶店と出会い、心をそっと癒していく人たちの物語。

914.6-ア『学生時代にやらなくていい20のこと』 朝井 リョウ || 著 文藝春秋

前回の図書館だよりでも紹介した作家・朝井リョウさんのエッセイ集です。

朝井さんの大学生活で起きた様々なハプニングが書かれているのですが、読んでいてとにかく面白いです。青函トンネルを自家用車で北海道に行くという実現不可能な旅を計画してしまったり、他学部の授業を受けて衝撃的な結末を迎えてしてしまったり、「どうしてそんなことになっちゃうの!」と笑ってしまうハプニングがこれでもかというほど出てきます。小説の繊細な雰囲気からは想像がつかない弾けた人柄の朝井さんを楽しめます。

☀️ 1冊の本から繋げよう ☀️

今月の1冊は…

東日本大震災から今月で2年が経ちました。こうして今、日常生活を送りながらも、私たちはあの日の、あの瞬間を、繰り返し思い出しながら暮らしています。しかし、震災のもたらしたものはあまりに多く、あの日を過去にしてしまうにはまだ早すぎます。現地では、今もなお、避難生活を送っている人々、行方不明の家族の探す人々がいます。そして、多くのものを失いながらも前を向き、故郷の復興に全力を注いでいる人々がいます。ここで、改めて、私たちもまた再び震災と向き合い、今の自分たちにできることを考えていく必要があるのではないのでしょうか。そんな思いから、今月の1冊を選びました。

369-I 『遺体』 石井 光太 著 新潮社

東日本大震災の後、被災地で生き延びた人々が目の当たりにしたものの。それは、想像を絶する惨状だった。受け止めきれない現実、叫びだしそうになる悲しみや怒りの感情、崩れ落ちそうな身と心を奮い立て、人々は自分が今やらなければならないことをやり抜いた。

安置された遺体に声をかけ続けた人、次から次へと運ばれてくる遺体を検案しつづけた人、街のあちこちに横たわる遺体を安置所に運び続けた人、そのどれもが過酷なものだったろう。自分の暮らす街でのそれらの作業は遺体の中に見知った顔を見つけることもある。それでも、自分の感情をおさえ、周囲を気遣い、亡くなったたくさんの命の冥福を祈る。その姿が記録されている。

ページをめくる度、浮かんでくる被災地の光景に胸が押しつぶされそうになる。しかし、私たちが想像するものは、現実が起こったものには到底近づけないのだろう。それでも、あの日を忘れないために、あの日を生き抜いた人々のことを知るために、この本を読んでほしい。

『遺体』 キーワード1

“3. 11” ~自分にできること~

359-サ 『人を助けるすんごい仕組み』 西條 剛央 著 ダイヤモンド社

震災直後、混乱の中にもありながらも、「自分にできることが被災地の誰かの力になれば」、多くの人々はその思いを胸に抱いていた。著者の西條剛央さんもその一人。行方不明の叔父を探し、被災地へ赴き、そして、言葉を無くす現実を見た。それと同時に生き延びた人たちの懸命な姿を見た。「すべてを失っても前を向こうとしている。何も失っていない僕らがやる気になれば、何だってできるはずだ」、その思いから“ふんばろう東日本支援プロジェクト”は始まった。西條さんは被災地支援の専門家でも、ボランティア経験者でもなかったが、自分の知識を活かし、人と繋がり、プロジェクトは瞬間に大きく広がっていった。ツイッターやフェイスブックの活用、被災地の現状とそれに合わせた支援、様々な取り組みが次々と生まれていく。多くの人の思いが力に変わっていくのが伝わってくる。

『遺体』 キーワード2

“家族” ~大切な人~

913.6-7 『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』 リリー・フランキー 著 扶桑社

書名のサブタイトルそのままの“オカンとボクと、時々、オトン”の物語。主人公のボクはリリーさん自身であり、お母さんを中心に自分の半生が綴られています。

少年から大人へと成長していく自分と、その傍らでずっと自分を支えてくれた母親。一緒に住んでいた少年時代も、離れて暮らした青年時代も、大人になって再び共に暮らすようになってからも、母の存在は大きかった。大切に育てられているという自覚があるから、自分もまた母を大切に想う。母にとっても、息子にとっても、お互いと過ごした時間は本当に幸せなものだったのでしょうか。それがひしひしと伝わってきます。そして、終わりに近づくころには涙なしには読んでいられなくなります。

いつもは照れくさくて言えない家族への「ありがとう」の一言もこれを読んだ後なら言えるかもしれません。

そして、

石井光太さんの作品を「もっと読んでみたい!!」と思った人には

916-I 『物乞う仏陀』 石井 光太 著 文藝春秋

本を開くと1ページ目から私たちを待っているのは衝撃的な世界の現実です。『これが真実なのだ、これが世界なのだ』と一文がありましたが、まさにその通り。地雷で手足を失うことも、体のどこかに障害を持つことも、貧しさ故にそれをどうしようもできないことも、よく見かける光景の中にある。写真のように目で見てわかるものがなくても、淡々と語られた著者の文章を読んでいだけで、凄惨な世界が自分の目の前に広がっていきます。

日本という恵まれた国で暮らす私たちは、咄嗟に彼らを“かわいそう”と思うかもしれませんが。だけど、読み進めていく内に、私たちの価値観で、彼らの暮らしは測れないと気づきます。過酷な環境で暮らす彼らにも、笑顔があります。幸せとは何だろう、世界の現実はどう向き合えばいいのだろうと、様々な思いが駆け巡る本です。